

# 世界短編名作選

## アメリカ編

監修 蔵原惟人



新日本出版社

# 世界短編名作選

## アメリカ編

監修 蔵原 惟人  
編集 池上日出夫  
永原 誠  
松本正雄

世界短編名作選 アメリカ編

---

1977年11月30日 初版

監修	蔵	原	惟	人
編集	池	上	日出	夫
	永	原		誠
	松	本	正	雄
発行者	松	宮	龍	起

---

郵便番号112 東京都文京区大塚3の3の1

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(945)8511(代表)

振替番号 東京3-13681

印刷 享有堂印刷 製本 小泉製本

---

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

世界短編名作選  
アメリカ編  
目次

おとなしい子……………	ホーソーン／貫名美隆訳	5
一兵卒の帰還……………	ガーランド／村山淳彦訳	41
レオポルド王の独白……………	トウエーン／池上日出夫訳	63
変節者……………	ロンドン／斎藤忠利訳	91
私の居間にどうぞ……………	ドライサー／永原誠訳	115
乾いた九月……………	フォークナー／鮫島重俊訳	169
朝日にひざまずく……………	コールドウェル／斎藤忠利訳	185
この世でいちばん幸せな男……………	モルツ／岡節三訳	213

火と雲……………	ライト／伊藤堅二訳	227
だれも死なない……………	ヘミングウェイ／伊藤堅二訳	285
ある金曜日の朝……………	ヒューズ／内山鉄二朗訳	303
神よアメリカに祝福を……………	キレンズ／田中礼訳	315
ドイツからの亡命者……………	マラマッド／大浦暁生訳	323
解説……………	池上日出夫	339



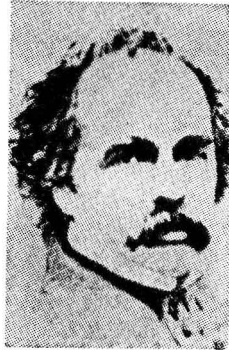
おとなしい子

トワイヌ・ワールド・テイルズ  
『むかしあった話』

から

ホーソーン  
貫名美隆訳





ナサニエル・ホーソーン

(一八〇四～六四)

代表的作品は、『緋文字』(一八五〇)、『七破風の家』  
(一八五一)、『プライズデイル・ロマンス』(一八五二)な  
どのほか多数の短編や日誌類がある。

一六五六年という年のさなか〔一六二〇年ブリタニアに上陸したビヤク新天地に根をおろしはじめたころ〕ニューイングランド〔イギリスからの移民が最も早くはじめたところ〕に、クエイカ（主のおことは）を直接霊感して身を徳わせる。移民地に、クエイカ（といわれた反ビュリタンのキリスト教徒の一派）だといわれる人がなんんかはじめて現われ、自分たちは内なる心靈の動きに導かれるものだといふ信仰告白をしました。彼らの行くところではどこでも、あれは秘教を信じる邪悪の徒だという評判が広まっていったものですから、ビュリタンたち（ここでは、一六二〇年にメイ・フラワ号でブリタニアに上陸した最初の移民たちのうちでも聖職一派、彼らが政教を支配し、彼らを通じてのほかは一般の「神とのたからし」を罪とした）は、はやくから、この新興宗派を追放してもうこれ以上は入り込ませまいといろいろな手を打ったのでした。ところが、彼らがこの異端の教えを彼らの地から払い清めようと思つて取つた手段は、それこそひどく熱のこもつたものでありましたがそれがてんで効きめがないのでした。クエイカたちは、いくら迫害されても、それは神が受難の部署につかしめられたのだといつてありがたがり、聖なる勇氣はわれわれにこそと主張しましたし、ビュリタンたちのほうは、はるかな広野（新大陸のこと）で、平穏に自分の信仰をおこないたいと思つて、試験（チャーレル・ビュリタ）を避けてやつて来たのでしたから、それはわけの

わからぬ勇氣でした。すべての人と仲よくするという主義（クエイカは自ら「友の会」といふ）のこの放浪の熱烈な信者たちが、世界のどの國の人たちにも受けいれられなかつたといふことは、奇妙な事実でありましたが、きわめて不安定で危険なだけにそれだけ彼らの目にはいちばんふさわしい場所（ビュリタンが最初）といへば、マサチューセツ湾地方（開いていた植民地）であつたのでした。

わたしたちの信心深い父祖たち（いづゆるビルグリム・フアーズ）は自らその手で、罰金や投獄やむち打ちを思う存分に恵み与へたし（神の名によつて、迫害をしたこと）、一般の人たちのけぎらいもたいへん根づよくて、はつきりとした迫害がなくなつてからも、なお百年ちかく衰えなかつたほどでしたが、しかしそれも、クエイカたちにとっては、安穩や名誉や報償が世間一般の人たちの心をひくのとおなじほどつよい魅力でありました。ヨーロッパから渡ってくるどの船もが、自分もいちどその迫害を受けてみて、ぜひその生き証人になりたいといふその派の新しい船荷を運んできました、また彼らに渡航の機会を与えないようにと、船長たちを重い罰金で押えるようになりますと、彼らは、ずっと遠まわりして、インディアンの住む遠いかなたからまるで神通力にでも乗つて来るように、この地方に現われるのでした。彼らの熱い信仰心は、彼らを待ちかまえる取り扱ひのおかげで、ほと

んど狂気のように高まり、道理にかなった宗教の規範はいうまでもなく礼儀作法にもそぐわないようなことをやりはじめ、今日彼らの宗派を継いでいる人たちの態度振舞いがおだやかでものしずかなのは、ひじょうな対照を示しました。彼らは、それこそ無礼なことを公然とやって見せておいて、これは、たましいにしか聞えないもので人間の分別でとやかくいえない心霊の声に従っているのだと申し立てるのでしたが、これはどうも理屈からいって、ほどほどのむちの懲罰ぐらひは、当然受けるだけのことはありました。そんな乱行と、その原因でもあり結果でもあった迫害とがますますひどくなつていって、ついに一六五九年、マサチュセツ湾植民地の政府は、殉教の冠をもつて、クエイカ派の二人の頭上を飾るにいたしました〔史実は四人〕。

これに同意した人たちの手はすべて、いまもなおぬぐい去れない血でよごれているのですが、しかしそのおそろしい責任の大部分は、当時その政府のかしらであつたその人物〔ジョン・エンデ〕に帰せられなければなりません。この人物は心のせまい教育の不完全な男でしたが、がんこ一徹なこの男はなにかというところにはげしくかつとなつてひどいことをするのでした、彼は自分の權威をやたらに振りまわして、その熱狂の信者たちを殺すことばかり考え、したがって彼らに対する彼のやり方はすべてひじょうに残忍であ

つたのでした。クエイカたちはただ受身であつただけに、そのうらみつらみはそれに負けないほど根深く、のちのちまでもこの男とその仲間たちのことを忘れませんでした。彼らの宗派の歴史家〔ウ・エス・ル〕はいまでも、「血ぬられた町」ボストンの地方は天の怒りによって災禍が降りかかり、そのためにここでは小麦が育たないのだと断言し、また彼は、いわば、むかしの迫害者の墓場に立つて、彼らの晩年あるいは臨終にかならず彼らを捕えた神の審判の一部始終を勝ち誇るがよりにくわしく物語っています。彼の話では、迫害者たちは、頓死したり、悶死したり、狂い死にしたりしたそうですが、なかでも例の粗暴な残忍な長官があいまわしい病気にかかり、「腐つて死んだ」というくだりのあのあざけり方はど毒どくしいものはおよそ他に例が見られません。

さきの二人がクエイカ迫害の殉教者となつたその当日の秋の日の夕ぐれのことでした。一人のピュリタン入植者が、首都ボストンから、その郊外の彼の住むいなか町へ帰つて行く途中でした。あたりはひんやりとして空はすみわたり、まだ消えやらぬ薄暮が、いままさに地平の線に触れんばかりの新月の光に照らされてはっと明るくなつていました。この旅人は、中年の男で、ネズミ色のフリーズ地の

上衣ですっぽりと身を包み、町のはずれにさしかかるとその歩をはやめるのでした、というのは、そこから彼の家まではまだ四マイルもうす暗い道を行かなければならなかったからでした。道路に沿って、ほんのときおり、低いわらぶき屋根の家が、点てんと散らばって立っているのでしたが、この地方に入植者がはいつてからまだやっと三十年ほどでしたので、まだもとのままの森の地帯が、開かれた土地に比べて、ずっと大きな割合を占めていました。秋の風が木の枝のあいだを吹きまわって、マツの木のほかは、どの木からも葉を舞い散らせて、まるでわれとわが手がもとのその荒涼を悲しんでいるかのように、ひゅうと鳴るのでした。道は、もう町にいちばん近い森の繁みを通り抜けて、さっと広い野原へ出ようとするところでした。ちょうどそのとき、その旅人の行く手から、風のうめきよりももっと陰鬱な音が聞えてきたのです。それは、だれか苦しんでいる人の泣き声に似ていて、切り開かれたままでまだ囲いもしない荒地のどまん中に、ひとりさびしくつつ立つたモミの木の下から聞えてくるように思えました。このピュリタンは思ひ出さずにはいられませんでした、そうだがこれはつい二、三時間まえクエイカたちが首をつられてもがき死に、死体が急ごしらえの一つ穴に束にして投げ込まれたあの処刑で呪いのかかったその場所だと。彼は、その当

時のあの迷信的な恐怖をむりにも払いのけて、こわばる足を引き止め耳をそばだてました。

「この声はどうも人間のものらしいぞ、それに、もしそうでなくても、わしがなにもこわがって震えるわけはないというものだ」と、彼は目を皿のようにしてうす暗い月の光をすかして見ながら思いました。「こどもの泣き声らしいぞ、きつとどこかの子が母親のもとから迷ってきて、たまたまこの死の場所へ来てしまったのだ。このわしの良心を安めるためにも、こいつははっきりさせなきゃならぬまい」と彼は考えました。

そこで彼は道からそれてはいり、それでもおそるおそる、その荒れ地の上を歩いて近よりました。あたりはまったく人けもありませんでしたが、地面は、昼間のあの場に立ち会い死んだ人だけを置き去りにして引きあげてしまった連中の、無数の足あとに踏みつけられて荒らされてきました。旅人がやっとモミの木まで来てみると、その木の下の方には処刑台が立てられその他いろいろな人殺しのため設備がしてありましたが、木のなかごろから上の方は枝がこんもりと繁っていました。かわいそうにもこの木はのちになって、有毒な露をしたたらせるといい伝えられるのですが、その木のま下に、罪もなく流された血を悲しむ人が一人さびしくすわっていました。それはほっそりとした

薄着の小さい少年で、あたらしく掘り返されたばかりの凍てかけの盛り土の下にその顔を伏せておいおいと泣いているのでしたが、それでもあまり大きな声で泣けば懲罰を受けはしまいかとおそれるように声を押しこらしているのでした。ピュリタンは、自分が近づいても気づかれなかったので、片手をその子の肩にかけて、思いやり深く話しかけました。

「かわいそうに、おまえさんはわざわざこんなさびしいところに泊ろうと思ったんだね、泣くのもむりはない。さあ涙をふいて、お母さんの家を教えておくれ。道のりがあまり遠くなければ今夜はおまえさんをお母さんのもとへ連れてってあげる、きつとだ」と彼はいいました。

少年は、きつと泣くのをやめ、顔を上げてこの見知らぬ男を見上げました。それは青白くて目のぼちりとした顔つきをしていて、どう見ても六歳以上とは見えませんでしたが、悲しきやこわさや空腹が幼児らしい表情をほとんどこわしてしまっていました。ピュリタンは、少年のおずおずしたまなざしを見てとり、彼がふるえているのを手に感じましたので、なんとか安心させようと努めました。

「いやいや、ぼうや、もしわしがおまえさんをいじめたいんならばだよ、さつさとおまえさんをここへほうって行ってしまうのが、いちばんかもしれんよ。いったいどうした

の、つり首なわの下で、掘りたての墓の前にすわってても怖くないのに、ともだちの手にふるえるなんて。元氣を出すんだよ、ぼうや、それで名はなんというの、家はどこなんだ」

「同信のかた」と、その子は口ごもりながらも美しい声ですぐ答えました。「イルブラヒムといいます。そして家はここです」

青白い気高いその顔、月の光と融け合うようなその目、美しくかるやかなその声、そしてその異様な名前を聞くとき、ピュリタンは、この子ほんとうは、いまその前にすわっている墓の中から現われ出てきた物のけではないかとさえ思うところでした。しかし彼は、その幽霊が彼の簡単な取りなしのメンタルテストに答えたことに気がつき、また自分が触れた腕が生きているようであったことも思い起こして、もうすこし合理的な推測をすることにしました。

「かわいそうにこの子は頭がおかしくなったのだ」と彼は思いました。「しかしそれにしても、この子のいうことは場所が場所だけに、それこそぞつとさせるわい」、そこで彼は、その子の幻想をあやすつもりで、なだめすかすようにいいました。

「イルブラヒムおまえさんのこの家は、こんなつめたい秋の夜にはあまり住み心地がよいほうではないし、それに食

べ物が充分でないのじゃないかね。わしはあたたかいわしの家へ急いでいるところだ、どうだい、いっしょに來ないか、めしもねどこもわしといっしょにすればよい」

「ありがとうございます、同信さま、しかし、わたしがおなかをすかして寒くて震えていても、あなたがたはわたしに食べ物も宿も与えようとはされません」とこの少年は、こんな幼いうちからはやくも絶望が教え込んでしまった落ちついた口調で答えました。「わたしの父は、人びとがみな憎みきらう仲間の出でありました。あの人たちがわたしの父をこの盛り土の下に埋めてしまったのです。だからここがわたしの家です」

イルブラヒムの小さい手を握っていたピュリタンは、まるでいやらしいへビかトカゲにでもさわっていたかのようになり、その手を引っこめました。しかし彼はその胸にあついで同情心を持っていましたので、宗教上の偏見はあつても、それで心を石にしてみようようなことはできませんでした。

「たとえこの子が呪われた宗派の出であれ、こんな幼な子をこのまま死なせるなんて、とんでもない」と彼は自分にいきかせました。「だってわたしたちはみなおなじ一つの邪悪の根から生れ出たのではないのか。わたしたちはみな光明が照らしてくれるまでは、やみのなかをさまよっているの

でないか。この子を朽ち滅びさせてはいかん、肉体も、そしてまた、祈ってやり教えてやってそれがこの子の助けになるなら、魂を救うてやろう」そこで彼は大声を出して、また墓穴の凍てた土に顔を埋めていたイルブラヒムに、やさしく話しかけました。「こちらではどの家もおまえさんを追っばらったんだね。そこでこのけがれの場へ来てしまったんだろ、ぼうや」

「みながわたしのおとうさんを牢獄から連れ出したとき、わたしもそこを追い出されました。それでわたしは、遠くからそのおおぜいの人たちを見ていて、みながいなくなつたのでここへ来ました、するとこのお墓しかなかったのです。わたしはおとうさんがここでねむっているのだとわかりました、それでわたしは、これがわたしの家だときめました」

「だめだよ、ぼうや、だめだ、わしが屋根の下に宿るかぎり、わしにわずかでもおまえと分け合う食いものがあるかぎり、そんなことは」とピュリタンは大声を上げました、彼の同情心はもうすっかりかき立てられていたのです。

「さあ立つんだ、そしてわしといっしょにおいで、なにこわがることはないから」

少年はわっと声を上げて泣き出し、まるで盛り土のその下の冷えた心臓がだれの生きた胸よりもあたたかであるか

のように、その土にしがみついたのでした。それでも旅人がやさしくたのむようにその子にいつづけていると、すこしは信用するようになったらしく、彼はやっと立ちあがりました。しかしそのかほそい足は弱ってよるめき、小さい頭がふらついて、彼はその死の立木にもたれかかるのでした。

「かわいそうに、そんなに弱ってるのかい。いつ食べたんだ、最後は」とピュリタンはいいました。

「わたしは牢獄でおとうさんからパンと水を少しわけてもらいました」とイルブラヒムは答えました、「でも、むこうの人たちは、おとうさんは旅の終わりまでもつだけもうたつぶり食べているといつて、きのうもきょうも、おとうさんになにも持ってきてくれませんでした。どうぞわたしがおなかをすかしているのは気にしないで下さい、これまでも、わたしはなんども食べ物がないことがありましたから」

旅人はその子をかいて抱いてオーバーの中へくるつと巻き込んでやりましたが、彼の心は、せずもがなのこの残忍な迫害のやり方がはずかしく腹立たしく思えてときめくのでした。彼は、そのように、あたたかい気持を呼びさまされる、天が自分におまかせになったこのかわいそうな身を守るすべもない幼い命は、なにを犠牲にしても見捨てま

いと心に決めました。彼は、そう決心すると、その呪われた荒地をあとにして、はじめその子の泣き声を聞きつけたたもとの道をふたたび家へ向かって急ぎました。軽くてじつとおとなしいその荷物はほとんど彼の足手まといにはなりませんでした。そして彼は、ほどもなく、彼の小屋の窓からもれるたき火のあかりをみとめました、それは遠国生れの彼が西部のこの荒野に立てた小屋でした。それはかなり広い耕地に取り囲まれていました。そしてこの住いは、繁った森の丘の奥まったところにあつて、その丘が伸びて出てぐるつと守ってくれているように見えるのでした。

「さあ顔を上げてごらん、ぼうや、わしらの家だよ」とピュリタンは、彼の肩に頭からぐんにやりとしなだれかかっていたイルブラヒムにいいました。

「家だ」ということはを聞くと、その子の全身を、びくつと震えが走りました、しかしその子はやはりだまっていたままでした。ほどもなく彼らが小屋の戸口まで来ますと、そこでこの家のあるじはコツコツと戸をたたくのでした、というの、この初期のころには、いたるところで、野蛮人（*アメリカ・インディアン*をさしているらしいが、当時は入植者が）が、入植者のなかへ迷い込んできましたので、住居の安全のために、さしくぎのついたかんぬきがなくてはならないものであったからでした。その呼び出しに答えて、下男の奴隷が出て

きましたが、粗末なものを着たぼそつとした顔つきのやつ〔著者の当時常識的な黒人観〕で、来訪者がご主人であることをたしかめると、戸のかんぬきをはずし、ゆらゆらと燃える松のこぶのたいまつをさし出してご主人の足もとを照らして案内しました。その赤い炎が、玄関の通路の奥のほうに、年配の気品のある女を照らし出しました。しかしおとうさんのお帰りを飛んで迎えに出ることもたちの姿らしいものは見られませんでした。ピュリタンは、中へはいると、外套をさつと払いのけて、イルブラヒムの顔をその女の前へ差し出して自慢そうに見せました。

「ドロシ、このかわいい宿なし子は天からのさずかりものなんだ。わたしたちのもとから天に召されて行ったあの子たちの一人だと思っただけがってやっておくれよ」と彼は思いぶかげにいうのでした。

「トウビアス、なんて白い顔して目がぱっちりとしたかわいい子だこと、この子は。あの荒野の連中〔インディアン〕がどこかのクリスチャンの母親から取り上げた子だろうがね」と彼女はたずねるようにいいました。

「ちがうよ、ドロシ、この子はいかにそうに、荒野のとりこなんかじゃないんだ」と彼はすぐ打ちけしました。「あの不信心の野蛮人でも、自分の乏しい食べ物を分けて食べさせ、またカバの木の Copp の水も飲ませてやったのである

うに、ところがなんと、クリスチャンの男たちがだよ、この子を追い出して死なせようとしたんだ」

それから彼は、その子が首つり台の下で父親の墓に向かつてすわっていたのを見つけた話や、また彼の心がひどく彼をせき立て、なにか胸の奥底の音が、この宿なし子連れて帰ってかわいがってやれといいつけているようであったことをすべに残らず話して聞かせました。彼は、この少年にわが子のように衣食を与えて、これまでこの幼い心に教え込まれた邪悪な誤信の毒を消す教えを受けさせてやりたいと、その決心をはっきりいきました〔クエイカを憎たピュリタンに〕。ドロシは生れつき夫よりも感じやすいやさしい心をもっていました、それで彼女は夫のしたことしたこととはすべて賛成だといいました。

「おまえさん、おかあさんはあるの」と彼女がききました。

その子はすぐに答えようとしたが、胸がつまってハラハラと涙を流しました。しかしドロシは、やっと、この子の母親も、おなじ宗派の他の人たちのように迫害されて放浪の身であることを知りました。この子の母親は、そのすこしまえに、獄舎から引き出されて人の住まない荒野へ連れ出され、そこで飢え死にするか野獣のえじきになれと置き去りにされたのでした。これはクエイカを処分するこ



くふつうの方法でしたが、クエイカたちは、砂漠に住む人たち〔インデチ〕のほうが文明人より親切にしてくれるといつも誇らしげにいつているのです。

「こわがることはないよ、ぼうや、おかあさんにかわってあげる、やさしいおかあさんにね」とドロシは夫の話から推量していました。「もう泣かないの、イルブラヒム、わたしの子になってね、わたしがおかあさんになってあげるから」

この気のないおばさんは、小さいベッドをととのえてあげましたが、それは、彼女のこどもたちがつきつきと安らぎのある国へ生れかわって行ったそのベッドでした。イルブラヒムはやつとそのベッドにはいる気になりましたが、そのまゝに、彼はひざまずいて祈りました、そしてドロシは、その純真なあわれをさそうお祈りを聞いているうちに、この子にそれを教えた両親が、どうして死の審判を受けたりしなければならぬのかとふしぎでなりませんでした。少年がぐっすりと寝入ると、彼女はその子の青白い気高いほどの顔つきをのぞきこんで、その白いひたいに口づけをしてかけぶとんを首のあたりへ引き上げてやり、ものがなしいようなられしい気持ちでそとと去るのでした。

トウピナス・ピアソンは、古い国〔イギリ〕からの最初の移民たちには加わっていませんでした。彼は、市民戦争

〔一六四二―四九年のチャールズ一世に対するクロ〕のはじめの数年は〔ムウエルらのひきいる議会軍の「神聖な」戦い〕

イギリスにとどまっていた、クロムウエルのもとで、竜騎兵隊の旗手として、その戦争に少しは貢献したことがありました。しかし彼の指揮者の野心的な意図〔クロムウエルが護を握つたこと〕がはっきりと表に出はじめたときに、彼はその議会軍をやめて、もう神聖でもなんでもないその争いから身を引いて、マサチュセツ植民地の自分とおなじ宗派の人たちの仲間に加わりたいと思いました。おそらくはもつと世俗的なおもわくが彼をそこへさそい寄せるのに力があつたのでしょう、というのは、ニューイングランドは、不満な信者たち〔イギリスのピ〕だけでなくて、あまり財運に恵まれぬ人たちにも有望なところだといわれたし、またピアソンは、すでに以前から、妻や増えていく家族を養うのに重荷を感じていたからでした。もつと信心の堅いピュリタンたちは、彼が子どもを全部死なせてしまったのは、きつとそんな不純な動機があつたからで、だいたいこの父親は子どもたちのこの世での幸福のことばかりかまひすぎたからだと思いがりました。彼の子どもたちは、バラの花のように生きいきとして生国をあとにし、そしてバラのように異国の土に枯ればたからでした。彼らは、こういうように同信の仲間を審判を下し、彼の一家の悲しみを彼の罪の深さのせいにするような捭理の道を説く人たち〔神に選ばれて